

2020年2月18日

沖縄看護卒業研究発表会で山口航さん、東恩納拓人さん、太田柊平さんが優秀賞演題賞受賞！

2020年2月18日、琉球大学で開かれた第4回沖縄看護卒業研究発表会（主催 生命医学研究振興財団）にて、山口航さん・東恩納拓人さん（基礎看護学分野：指導教員 豊里竹彦）と太田柊平さん（成人・がん看護学分野：指導教員 照屋典子）が優秀賞演題賞を受賞しました。研究内容の詳細はこちら。

卒業研究では、健康に影響を及ぼすさまざまな事象及び健康問題をとらえるための基本的な知識や方法を習得するなど、保健学を基盤とした研究能力を習得します。

4月からそれぞれ看護師や保健師として沖縄県の保健医療に従事しますが、「本研究結果を看護実践に生かしていきたい」と語っていました。

研究テーマ

山口航： 「看護師のキャリア成熟とワークエンゲイジメントおよび離職との関連」

東恩納拓人： 「沖縄県内の MSM（Men who have sex with men）における HIV 検査受検の促進・阻害要因の解明を目的とした質的研究」

太田柊平： 「介護老人保健施設で看取りに携わる看護職・介護職のアドバンス・ケア・プランニング及び看取りに対する認識に関連する要因の検討」



研究者氏名	山口 航
所属	琉球大学医学部保健学科基礎看護学分野
連絡先 (電話、E-mail)	
研究タイトル	看護師のキャリア成熟とワークエンゲイジメントおよび離職との関連

【目的】キャリア教育とは、人生設計の中の一つの要素として仕事を選択し、自身のキャリアアップについても人生の目標から逆算し、今どうすべきかを考えることを促す教育である。本研究ではキャリア教育との関連が考えられているキャリア成熟度(以下 ACMS)と WE および離職との関連について検討することを目的とした。

【対象・方法】沖縄県内外の 17 病院で勤務する看護職 719 名に対し、自記式無記名質問紙調査を行い同意の得られた 664 名を分析対象とした。分析は、WE を従属変数、ACMS の下位領域「人生キャリア成熟(以下、LCM)」「職業キャリア成熟(以下、OCM)」を独立変数、基本属性で関連のみられたものを調整変数とする二項ロジスティック回帰分析を行った。また、離職意向を従属変数、「人生キャリア成熟」「職業キャリア成熟」それぞれのさらに下位領域である「関心性」「自律性」「計画性」を独立変数、年齢を調整変数とする重回帰分析を行った。

【結果】基本属性は、女性が 83.4%と最も多く、またキャリア教育を受けたことがないと答えた者が 75.0%と最も多くを占めた。ロジスティック回帰分析の結果、LCM 高群 (AOR=1.72, 95% CI=1.19-2.49), OCM 高群 (AOR=4.09, 95%CI=2.76-6.09) いずれにおいても有意差が認められた。さらに、重回帰分析の結果、LCM「関心性」「計画性」を除く 4 つの下位領域と離職意向との間で有意な負の相関を認めた。

【考察】本調査において、人生設計をもとに職業的発達を促すことで、自身のライフプランに応じた働き方を実現することで個人の活性化が図られ、結果として看護師の離職率低下に寄与する可能性が示唆された。したがって、今後は職業生活に加え、各個人の人生や生き方を含んだキャリア教育が必要であると考えられる。

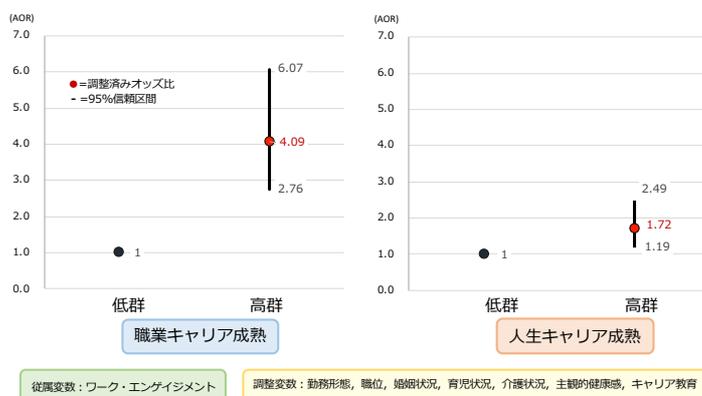


Fig.1 ワーク・エンゲイジメントと職業、人生キャリア成熟の関連

Table 1 人生キャリア成熟度、職業キャリア成熟度のそれぞれの下位概念と離職との重回帰分析

独立変数	β	t 値	R	R ²	p 値
人生キャリア					
関心性	0.017	0.413	0.053	0.003	0.679
自律性	-0.312	- 7.797	0.316	0.100	0.001
計画性	-0.154	- 3.760	0.163	0.026	0.132
職業キャリア					
関心性	-0.093	- 2.186	0.116	0.013	0.012
自律性	-0.421	-10.812	0.424	0.180	0.001
計画性	-0.276	- 6.728	0.282	0.080	0.001

研究者氏名	東恩納 拓人
所属	琉球大学医学部保健学科基礎看護学分野
連絡先 (電話、E-mail)	
研究タイトル	沖縄県内のMSM (Men who have sex with men) におけるHIV検査受検の促進・阻害要因の解明を目的とした質的研究

【目的】 本研究では沖縄県内のMSM (Men who have sex with men: 男性と性交渉をする男性) のHIV検査受検の促進・阻害要因について質的に研究し、HIV検査受検を促進する方策の示唆を得ることを目的とした。

【対象・方法】 対象は沖縄県内在住のMSM 9名で、フェイスシートを用いて基本属性を確認し、インタビューガイドを用いて半構造化面接を実施した。了承を得て録音を取り逐語録を作成し、内容分析を行った。

【結果】 内容分析の結果、120個のコード、20個のカテゴリーが得られ、カテゴリー間の相互関係から関係図を描いた(図1)。関連図から<感染への不安を契機とした受検へのプロセス><受検の妨げとなる環境とコミュニティ風土><受検経験による意識の変化と定期受検>の3つのテーマが導かれた。

【考察】 感染の可能性の自覚を有しても受検に至らない背景として自尊心の低さがあると示唆されたことからMSMの自尊心を向上させる取り組みが必要である。検査に関する情報の不足が初回受検への不安につながると考えられ、具体的な情報発信の強化が必要である。HIV陽性者の不可視化の原因として、真摯に語り合う場がなく、HIV陽性者が自身の病気のことを打ち明けにくい現状が推測される。そのためHIVについて気軽に語りことができ、HIV陽性者が差別されることのないコミュニティ形成が必要であると考えられる。さらに、定期受検者に加えて初回受検者が増加することで受検ニーズと検査機会の不均衡が拡大することが予測されるため検査機会の拡大は急務であるといえる。

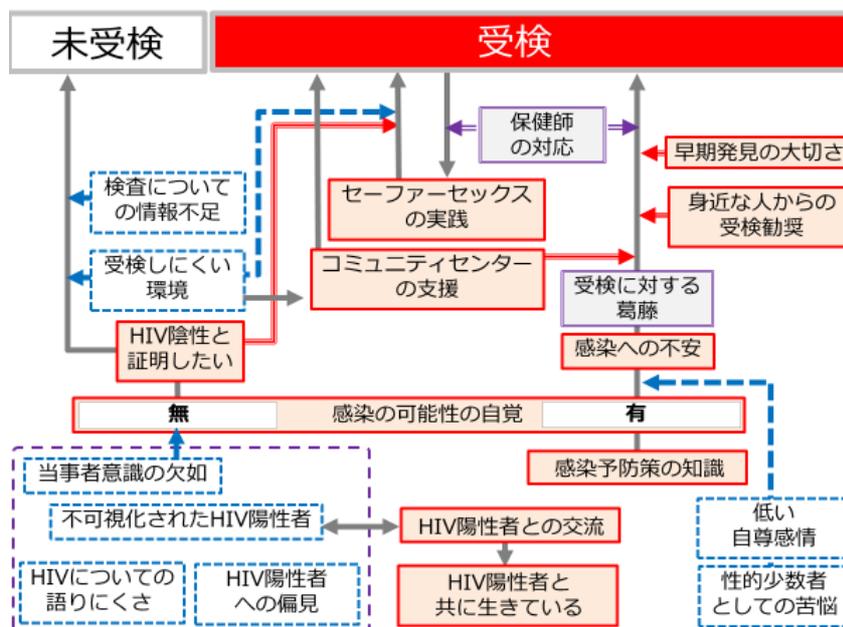


Fig 1. 結果の全体図

研究者氏名	太田 柊平, 福地 優奈, 宮城 葵月
所属	琉球大学医学部保健学科 成人・がん看護学分野
連絡先 (電話、E-mail)	
研究タイトル	介護老人保健施設で看取りに携わる看護職・介護職のアドバンス・ケア・プランニング及び看取りに対する認識に関連する要因の検討

【目的】本研究では、介護老人保健施設(老健)で看取りに携わる職員のアドバンス・ケア・プランニング(ACP)や看取りに対する認識に関連する要因を明らかにし、看取りを推進する上での課題を検討することを目的とした。

【方法】県内老健 41 施設の看護職・介護職 205 名を対象とし、無記名、郵送法による自記式質問紙調査を実施した。90 名(43.9%)から回答があり有効回答 88 名(42.9%)中、看取りを実施している 74 名を分析対象とした。調査項目は施設概要、基本属性、死生観、ACP・看取りの取り組みや満足度、職員間連携等である。ACP・看取りの取り組み及び看取りに対する満足度の得点を中央値より高低群に分類し、ロジスティック回帰分析を行った。本研究は、当大学の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

【結果】ACP・看取りの取り組みには、自身の ACP(OR:3.54, p=0.038)と職員間連携(OR:1.44, p=0.000) が有意な関連を認めた(表 1)。また、看取りに対する満足度には、職員間連携(OR:1.46, p=0.001), 死生観尺度の人生の目的意識(OR:1.18, p=0.042), 職種(看護師:0, 介護士:1, OR:0.12, p=0.011)が有意な関連を示していた(表 2)。

【考察】老健において ACP や看取りを推進していくためには、自身の ACP に向き合うことや看護職・介護職間で利用者のケア目標を共有しながら、チームで取り組むことの重要性が示唆された。看護職に比べ看取りに対する満足度が低い介護職員に対しては、日々のケアや看取り支援を通して自己効力感が高まり、充実感につながるような支援体制の整備が必要であると考える。

表 1 ACP・看取りの取り組みに関連した要因

	B	標準誤差	p	オッズ比	95信頼区間 下限 上限
自身の ACP	1.26	0.61	0.038	3.54	1.07-11.70
職員間連携	0.36	0.09	0.000	1.44	1.20-1.722

モデル χ^2 検定 p<0.01 ; Hosmer-Lemeshow 検定 p=0.947 ; 判別の中率 74.3%

表 2 看取りに対する満足度に関連した要因

	B	標準誤差	p	オッズ比	95信頼区間 下限 上限
人生の目的意識	0.16	0.08	0.042	1.18	1.01-1.38
職員間連携	0.38	0.11	0.001	1.46	1.17-1.83
職種 (看護師:0介護士:1)	-2.10	0.82	0.011	0.12	0.02-0.61

モデル χ^2 検定 p<0.01 ; Hosmer-Lemeshow 検定 p=0.784 ; 判別の中率 79.7%